

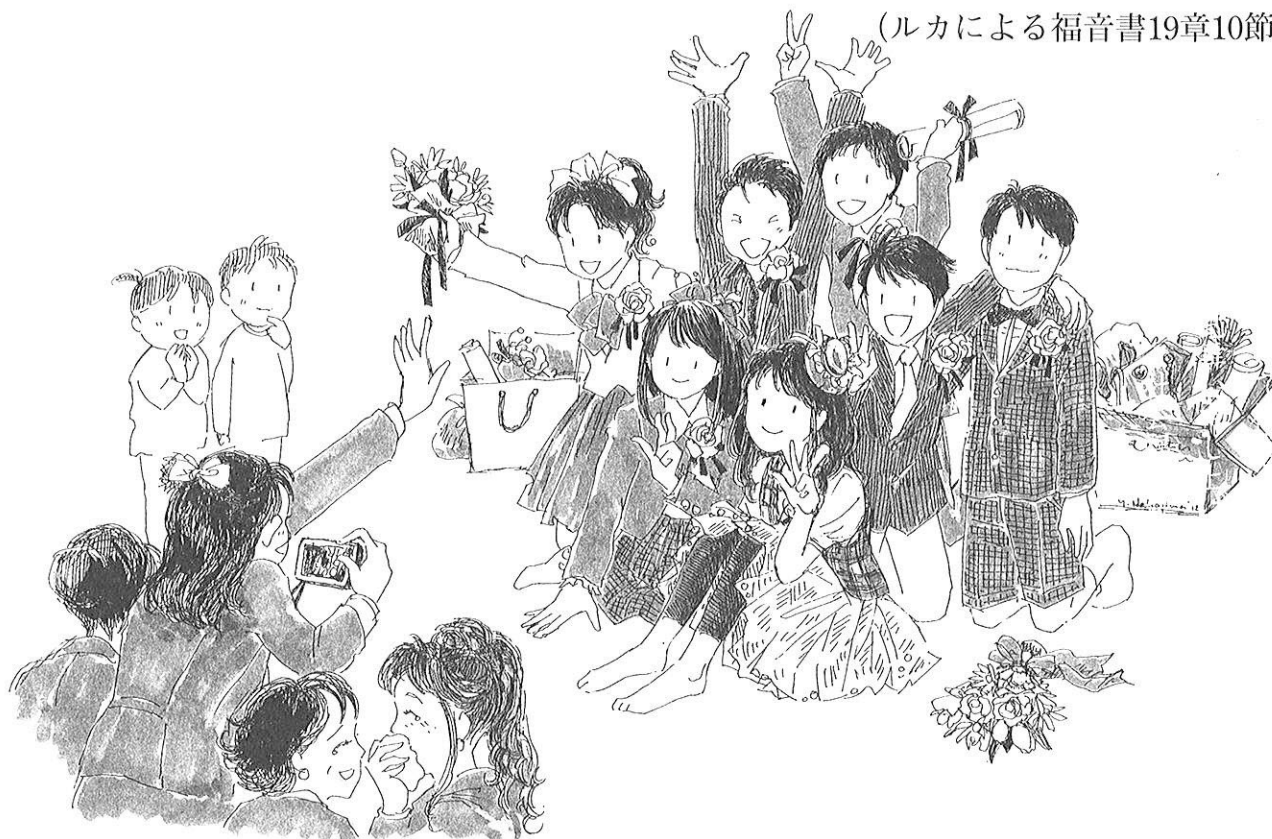
# 光の子



No.152 2012.4.15

●年間聖句 人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである。

(ルカによる福音書19章10節)



「卒業のとき」

挿絵・中島由起子

「光り」

大堰を越えて春水大橋へ

希望へと向かひぬ青き踏みながら

春光をとび出して子等駆け出せり

大利根の土手の春へと駆けのぼる

風光る水光る野の子等光る

日と水に恵まれて立つ芦の角

野の空の光の点は揚雲雀

落合水尾

〔浮野〕主宰

## 3.11からのこの一年

前山形大学学長 仙道 富士郎

「忙しい、忙しい」と言っている人の多くは、忙しくなるように自分を仕向けているのだとよくいわれるが、私もそうしているのかもしれない。三・一一東日本大震災が起きて、原稿を書いている今日でちょうど一年が過ぎたが、なにか無性に忙しかったという感慨だけが残し、何をしてきたか思い起こそうとしても、自分がしてきた具体的な事柄をなかなか思い出せない。もちろん老化による記憶喪失によるところも小さくはないが、シニアボランティアとして過ごしたパラグアイでの二年間の出来事は、結構時間を追って思い浮かべることが出来るのである。夢中になって走ってきたので、自分のしてきたことを振り返ることが出来ないというこの

ようでもある。以前「光の子」にも書いたが、三・一一の大震災が起ったとき、自分も何かしなければならぬという想いに促がされて、覚えてたのフェイスブックを利用して、被災地の子ども支援プロジェクトを立ち上げた。といっても、言い出したのは確かに私だが、インターネットに関する知識を駆使して、フェイスブック上にプロジェクト組織を作るといった作業が私に出来るはずもなく、もとIBMの社員だった若手の山形大学教授とIT関連の仕事の経営者でもある女性が、技術的なことはすべて担当した。こんな状況のなかで、何も出来ない私が夢中になるというのも変な話であるが、気持ちの上では、何かに憑かれたような感じで、結果的にはプロジェクトの推進にはほとんど役に立たなかったのだが、せかせかと忙しく過ごしてきたのは事実である。

私がプロジェクトで唯一誇れる(?)事と言ったら、会議が終わった後に、「まだ夕飯前でないの?」とお酒に若い人たちを誘い、彼らの労をねぎらったことぐらいである。ただ、ITの渦中にいる若者たちは、ITを対象化してものを考えるには、あまりにも対象に近づくすぎていて、かえって困難であるようでもある、よくITが分かっている私の方が、そういうことをするのに適しているのかもしれない(これも、あくまでも強がりであるのだが)。私たちがいま利用しているフェイスブックをはじめ、ツイッター、ミクシイなどの、インターネットを用いて双方向の発信を行うsocial network service(SNS)は、いま若者を中心に急速に広まりつつあるが、友達とおしゃべりをするのには、またとない道具であるのだが、これを私たちのように、少しお堅いことに利用しようとする、かなり不便な点があることも分かってきたような気がしている。なんと、何も知らない私なのに、いま始めた「子ども支援フェイスブックプロジェクト」を、フェイスブックを、お堅いことに利用するためのパイロットスタディの一つとして位置づけようなどと、若者達にはつばをかけたりののだ



から、恐ろしいものである。楽しいこともある。このプロジェクトを通して、私には三十、四十歳も若い友人がたくさんできたのである。どうか読者の皆さんも「子ども支援フェイスブックプロジェクト」で検索して、私たちのプロジェクトを覗いてみて下さい。そして、興味を持った方はどうぞ、プロジェクトに参加してください。

## 新年度を迎えて

施設長 田中 郁夫

三月十一日の大震災と原発事故で、大混乱のなか新年度を迎えましたが、いまだに先の見えない避難生活を送っている方々が大勢おいでになり、その苦しみや痛みはいかばかりかと思えます。ここにいます子どもたちも、自分の意思とは関係のない今回の震災や事故のような経験の中で、やっとなににたどり着いています。その心には計り知れない傷や痛みを受けており、その傷や痛みを少しでも和らげる事ができるようにと願いながら、日々の生活を送っております。昨年度も皆様の祈りに支えられ、子どもたちと共に過ごすことができました。本当にありがとうございます。振り返りますと、様々な出来事がありましたが、特に昨年度は、私たちが経験した事の無いような子どもたちの表現や行動があり、職員はその対応に追われ、心を痛めた年度でもありました。職員会議を何回も開催し、どこに問題があったのか等、協議を重ねました。そしてその時期は次年度に繋げるため、子どもたちの自立支援計画や事業計画の反省や見直しをはじめた時でもあります。そのことから、この年度は時間をかけて我々関わる職員の自己総括から始めました。

「子どもたちとの関わりや自分の働きについての自己総括」で、職員会議に個人が書いた総括文を基に、ほかの職員が「評価する点、足りなかった点、直すべき点」等を指摘しあう方法で行いました。その中で明らかになったのは、二十七年の慣れから生じた、我々が大切にしている生活づくりの上で、「伝える」「確認する」ことを、見過ごしてきた等の問題点であり、今一度やり直す気持ちで今年度に繋げる決意をしたところでもあります。今年の正月も家庭に帰省出来なかった子どもがほとんどで、元旦には卒園生もたくさん帰ってきて賑やかな時をすごしました。その中に、開設時(一九八五年七月一日)の七月八番目の児童として乳児院より措置変更で入ってきた高山嬉君も元氣な姿を見せてくれたのですが、一月十六日早朝、事故によって三十一歳のお亡くなりになりました。両親も既にお亡くなりになっており身寄りも無いため、当法人で亡骸を引き取り、前夜式・告別式をいたしました。彼はここで育ちここから自立していった子どもで、造園の仕事をし、時々施設に来て園庭の手入れをしてくださいました。前日の十五日に菅原理事長の誕生日お祝いを、卒園生が中心となり実施した時も参加していただきました。その翌朝の出来事であり、私たちはとても信じられませんでした。亡骸を引き取るにも親族でないため手続きに時間がかかり、彼が光の子どもに家に帰ってきたのは翌日、その間一人で安置されていたと思うと

本当に悲しくなってしまう出来事でした。彼と一緒に時期に共に生活してきた卒園生に前夜式と告別式の日程を連絡し、約三十人の卒園生と、当時の職員や乳児院の先生方も参列して下さり、彼とお別れをする事が出来ました。火葬して施設に戻った後、彼を偲ぶ会を卒園生と共に食事を囲みながら実施し、色々な思い出に花が咲きました。その話題の中で卒園生の一人が「四天王で知ってる?」と聞くと「知ってるよ、竹花・倉沢・岩崎・池田のことだろ。」「顔を出すといつも自分たちの小さかった時の話をするよね。」「なんか恥ずかしいし、嫌だけど嬉しくもあるよね。」「この四天王がいなかったら帰らないうね。」「等の会話が側で聞いていた私は、熱いものがこみ上げるのを感じました。子どもたちの側に二十七年間寄り添ってきた四人の職員、そして、懸命に寄り添おうとしている若い職員が、この光の子どもを支えていると思えば、畏敬の念を覚えます。私たちがはたきや関わり方の原点でもある子どもたちの側に居続ける事の大切さを、改めて確認できた一時でした。今後もその事を大切にしたい。今年度も頑張ります。皆様方の変わらないご支援とご指導を宜しくお願い申し上げます。

# 「共育ちカンガルー日記」

(17) 告白

近藤みちる

月に一度面接に通っている発達障害支援センターの相談員から、とある自閉症セミナーで自閉症児の親として体験談を話してもらえないかと持ちかけられたのは、去年の秋のこと。セミナーのタイトルは「うちの子の良いところ応援計画」だと言う。「ユキちゃんもお母さんもいつも笑顔で楽しそうなので。笑顔で暮らせる工夫のようなものを話してもらえれば。」相談員のそんな言葉に乗せられて、私はその依頼を軽い気持ちで引き受けた。

だが後になって、私はとてもないことを引き受けてしまったことに気づいた。うちの子の良いところ応援計画？笑顔で暮らせる工夫？そんな大そうなテーマで、いったい私に何が語れると言うのだろう。

自閉症児の子育ては、文字通り奮闘の日々である。痾癪やこだわりに振り回され、意志の疎通がとれないもどかしさに苛立ち、一向にすまない身辺自立に辟易し。おそらく健常児の子育ての何倍もの労力と根気と信念の強さが必要だろう。私には

過ぎた荷だ。

ユキの成長に伴い、最近ではユキが次々と投げつけてくる直球や変化球に翻弄される毎日だ。ユキの休当たりを丸ごと受け止めることも、巧妙に受け流すこともできず、逆切れしてユキに暴言をぶついたり手を挙げてしまうことも増えて来てしまった。結局は自分が未熟なだけなのだ。自分の弱さを容赦なく露呈させられる毎日に、私はすっかり自信を失い、疲れ果てていた。そう、本当はとも苦しいのだ。笑顔で育ててなんかいられないのだ。もう取り繕うのはやめよう、そう決心した。

「講演のお話しをお断りしたい」思い詰めた表情でセンターを訪れた私を、相談員はいつもと同じ穏やかな笑顔で迎え入れてくれた。冬日の差し込む面接室で相談員を前にすると、私は喉を切ったように感情が溢れ出した。

お友達の中でユキだけが置いてきぼりを喰って行く惨めさ。ところ構わずユキが見せる痾癪や奇異な言動に向けられる周囲の冷ややかな視線。

「この子自閉症なんだ」と言い訳するときの居心地の悪さ。近所の子ども達にからかわれているユキを守つてやれない後ろめたさ。誰も気づきもしないところで、本当はひどく傷つき、怒り、苦しみ、涙を流していた。どこにも行きたくない日も、誰にも会いたくない日も数え切れないほどあった。それでも私は必死に笑顔でユキを外に連れ出し、平気なふりをし続けてきた。

なぜだろう。そう、私はユキをみんなに愛してもらいたかった。ユキの居場所をたくさん作ってやりたかったのだ。だがユキのためにという願いとは裏腹に、無理を重ねたしわ寄せは結局ユキに向けられていた。自閉症の人は、辛い体験を忘れられず何度もフラッシュバックを繰り返すと言われているが、それが私を一層不安にさせた。もう取り返しのつかないほどの辛い体験をユキに負わせてしまっているに違いない。そこでまで話すと、涙が溢れてきた。レースのカーテン越しに、黄金色の西日がきらきらと私たちを包んでいた。私の告白を相談員は静かに聞いていた。

「お母さん、ユキちゃんは大丈夫です。彼女には、人に対する基本的な信頼感が根付いています。人は絶対に自分を守ってくれるものと信じている。これは奇跡的な成長ですよ。お母さんがユキちゃんと必死に

向かい合う中で育まれたもので、もう揺らぐことはありません。親子なんですから、ぶつかるのも当然。いつもそばに居続けて、ユキちゃんに正直でいることができれば、それでいいんです。辛い体験は忘れなくても、それを無かったことにせず親子で共有してください。そうすればフラッシュバックなんて、怖くも何ともないですよ。」そして、こう付け加えた。

「今回の講演は、先輩ママに任せましょう。でもいつの日か、今日のことを後輩ママ達に伝えて欲しい。そのときは講演してください」

私のピンチヒッターに立ってくれたのは、三人兄弟を育て上げたベテランママだった。後日相談員から聞いた話だが、講演で語ったあるエピソードに会場は大爆笑に包まれたそうである。その内容だが、育児疲れで苛立っていた母親が些細なことで爆発し洗濯かごを叩き壊してしまっただけがあった。健常児の長男は外に逃げ出し、三男は狂ったように泣き叫んだ。だが自閉症の次男だけは全く動じることなく、粉々に壊れた洗濯かごを実に淡々と何事もなかったように片づけてくれたそうだ。彼には大いに泣かされ大いに救われた、というのがオチだったそうである。優しくも強くもなれずしゃべん玉みちる

Aさん

中島 睦雄

ディスカッションとか、ディベートとか、有意義な結論を求める話し合いが、いろいろな社会で展開されている。学校教育の中でもAの立場、Bの立場を決めて、それぞれの立場に於ける理論を、どのように相手に

正確に伝えるか、という訓練なども、実際行われていると聞く。

しかし、そのような、結論を求めるのではなく、単なる遊びとしての言葉のやり取りも、日常生活の中にはいくらでも存在する。

ただし、その場合、AとB、或いはCといった人達の間に、或る信頼関係や親密さが前提と

して必要であろう。そうでないと、遊びとしての会話が、かえってお互いの人間関係を悪化させてしまうという事態にもなり兼ねない。ところが、お互いの信頼関係の上に立った遊びの会話や毒舌は、そ

こに笑いを生み、楽しい雰囲気を作り出すものである。

こんなことを考えると、どうしてもAさんのことを思い出さざるを得なくなってくる。

私が以前、人間ドックに入り、その結果がわかった時、何人かの仲間達と雑談していた。そこで簡単な報告をしていたのだが、「結果はねえ、あそこが悪い、ここが悪いと言われちゃった。」という、マジメな顔をしてAさんが、

「あら、そうですか。悪いのは頭だけじゃなかったんですか？」と言って私の顔をのぞき込んだ。まわりにいた人達は、エッ、そんなこと言って良いの？とも言いたげな表情をした。

しかし、ズバッと毒舌を吐くAさんには、悪気はない。それがわかってから、会話がおもしろくなるのである。

Aさんは、私より二十歳くらい若い女性で、下総皖一という音楽家を顕彰する会の仲間である。この音楽家は、五十年前に六十四歳で亡くなった方で、「たなばたさま」「かくれんぼ」「花火」「野菊」など、良く知られた曲の作曲家である。また全国の学校の校歌五百数十校の曲を作っている。京

都大学の校歌、応援歌、イチロー選手の母校、愛工大名電高校の校歌なども。

また、昭和七年のドイツ留学の折、高名なパウル・ヒンデミット教授に師事することにより、西洋音楽を学びながら、日本の伝統音楽にも深い関心を示し、西洋音楽と日本音楽の橋渡しを求める多数の曲を作った。その数二千曲とも三千曲とも言われている。また、数々の音楽理論書の著作も有名である。東京芸術大学の音楽学部長もつとめ、その他の大学に於いても、数々の俊英を育てた。

この音楽家を顕彰する三百数十人の会員の中の役員の一人としてAさんがいる。これらの役員の中の、特に「ドンチと毒舌」のAさんである。

「シューマイを作ったから、持っていってあげますよ。」と電話がきた。私が、「どうもすみませんね。札束も一緒にね。」

と言うと、「はい、わかりました。いつものように。」

私が外出先から帰ってみると、ポストの中にシューマイが入れてあり、食器の上に細い紙がはって

あって、「約束の札束は印刷機が故障ですの。」と書いてある。

また或る時、「お汁粉を作ったから少し持っていきます。」

と電話があり、赤い鍋に入った汁粉と餅を、例によってポストに入れておいてくれた。今度は珍しく少しもふざけてなくて、マジメに、「早めに食べましょう」

と、細い紙がついていた。どんなふうにして鍋を返そうかな、と思った。少しカラかってやろうと思い、人に頼んで、コンビニエーターで小判をカラーで印刷してもらった。これを少し厚い紙に張りつけ、丸く切り取り、金粉で少し色を重ね、白い和紙にいてねいに包み、赤い鍋に入れてお返しした。後でAさんに会った時、「本物と間違えてニセ物をやっちゃったろうか。本物の小判が家に残っていたから。」

と言うと、「そうでしたか、いただいた純金の小判、画鋏で壁にとめておきましたよ。」

との答え。今度もまた、怪しいなされた。

## 原田家日記

インフルエンザが流行していますが、いかがお過ごしでしょうか？さて、体調管理も難しい時期ではありますが、もう一つ恒例の試験が子ども達に訪れました。二月三日節分、鬼との対決の日です。小学生の美貴は「正太郎、大丈夫？」と園児の正太郎を気遣いつつ、実は自分も緊張している様子。小学生、大輝は「大輝、全然平気だから。どうせニセモノの鬼だし！」と虚勢を張り、正太郎にいたっては食が進まない。表情も完全に固まっていました。そんな様子はとても可愛らしいのですが、今にも大笑いしてしまいそうでした。

いよいよ鬼が登場！豆を投げることを忘れ、固まる大輝と正太郎。やがて覚醒したのか豆を投げ始めたものの、正太郎は二粒しか投げられませんでした。それでも泣かなかったのは、去年に比べて成長した証かもしれません。就寝時、感想を聞くとぼつりと

一言。「怖くないと思っていても、無理なものは無理！」それもそうだなと納得する同時に、思いきり抱きしめて労いながら眠りに着きました。

今年も原田家に、たくさんのお福が訪れますように。



光の中で

佐藤家

この春、浩伸と由子が光の子どもの家を卒園することになり三月十七日、これまでお世話になった方々をお招きして、光の子どもの家の仲間達と共に十四回目となる

出発の会を行いました。たくさんのお客様から心暖まる激励を受け祝福に満ちた集いを行うことができました。

浩伸が光の子どもの家に行ってきたのは、まだ言葉のうまくしゃべれない二歳の時。「浩伸はモングルの平原で暮らすことが一番むいていいる」と言われているほど野性的でとても感性豊かな少年時代、驚かされる行動はたくさんありましたが、憎めないパーソナリティでたくさんの人々に愛されてきました。幼児期から走ることにかけては右に出る者はなく将来は箱根駅伝にと言われた逸材でした。今の子ども達はおとなしい子が増えていますが、浩伸はたくさん笑って、たくさん泣いて怒って本当に子どもらしい子でした。

中学時代、東大宮教CS夏期学校で開発途上国の農業指導者を育成するアジア学院に泊まり込みで行ったことで刺激を受け「将来の日本の農業を背負うんだ」と言って農業高校に進学。学校の先生方や仲間達のおかげでたくさん汗

をかいて畜産や農業に勤しみ充実した高校生活をすごすことができました。

進路選択では色々悩みましたが、東日本震災での自衛隊員の皆さんの命がけの行動に影響を受け「自分も人の役にたつ仕事したい」との思いで志願し陸上自衛隊で働くことになりました。自衛隊の採用担当者からは体力面では埼玉で一番といわれるほどの運動能力と言われ、体力面では全く心配はしていませんが、厳しい縦社会の組織で忍耐できるか心配しております。

私たちはただ心配することしかできませんが、心も身体も一段と鍛えられた浩伸に再会する日を楽しみに彼の成長を祈っています。

穴水 祐介



## 子どもたちの季節 仙道家

ようやく日が長くなり、春を待ちわびる今日この頃、皆様がいかにお過ごしでしょうか。

二月三日の節分には、我が家に鬼が三匹やってきました。来てまだ一年と経っていない尚実は今年の節分が初体験です。尚実には鬼退治の達成感より、守られたという印象付けをしたかった為、数日前から「いにと彬と智司に守ってもらおう」と言う話をしていました。

ところが、当日の夕食中、兄は妹が怖がっている事を分かっていたが、「連れて行かれるよ」と言い出したのです。次第に涙目になってくる尚実に私はいにとがやつつけてくれるから大丈夫と声を掛けました。兄も泣きじゃくりそんな妹を見てようやく、「なお！大丈夫だから！」とやっと励まし始めていました。そんなときに鬼がやってきたので、尚実はものすごい速さで担当に抱きついてきました。しがみついたまま目をつむり、必死の様子。一方兄はと言うと、座ったまま、黙々と豆を鬼に投げつけていました。鬼が近づいてくると少しおどおどしてしま

たが、玄関まで追いかけていき鬼を退治しました。目をつぶっていた尚実に担当から退治の様子を話しましたが、守られたと言うより、鬼が来たことが兎に角印象に残ったようでした。

数日後に尚実が言った一言は衝撃的でした。「鬼のお面はえのぐでぬったの？」私は「お面では無く、首と顔はつながってるよ！人間じゃないからお面のように見えるたんじゃない？」と無意味な言い訳をつい、してしまいました。鬼のおかげでまたひとつ新しい一面が見れました。次はどんな尚実を見せてくれるのか、楽しみです。

田口 貴子



## 季節のおとずれ 竹花家

ごっこ遊びが大好きな楓と冬子。警察ごっこを始めました。そこに中学生の美也子加わってくると「じゃー美也子ちゃん部長ね!!」と二人は大喜び。張り切って役になりきります。

美..被害者の様子を見てこい!!

冬、楓..はい！部長！

美..被害者は何歳くらいか？

冬..四十八歳くらいです！

美..(笑)四十八歳くらいじゃなく、四十歳から五十歳くらい、とか答えるんだよ！

体型は？

冬..がに股です！

担、美..(爆笑)体型が、がに股って...!!

美..では、報告書を書け！

冬..はい、部長！おい、自由帳もってこい!!!

楓..はい！

書き書き...

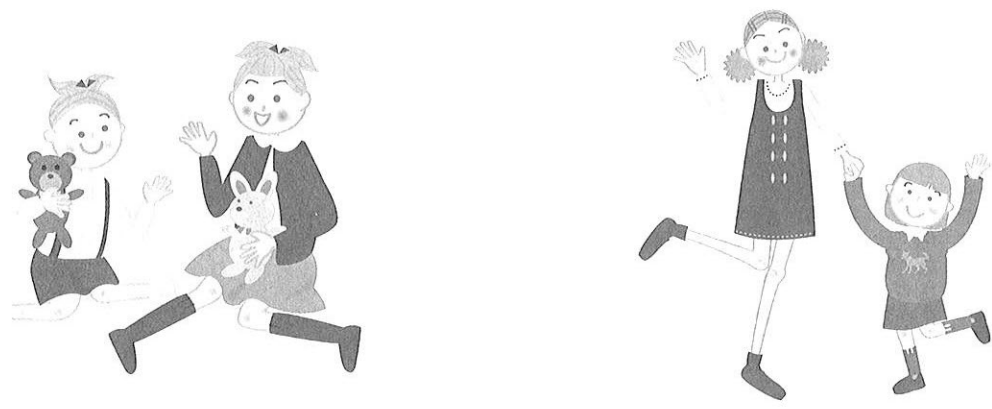
冬..部長！葬式はどうしますか？

里..(笑)

楓..葬式はけっせきさせてもらいます！

...つづく。

牧野 由紀子



# 養育論の試み その5

かわる

菅原 哲男

今年一月十五日、七十三歳になった。毎年この日の前後は、常と違う空気の中で過ごしてきたように思う。しかし、今年は格別だった。

光の子どもの家から巣立った者たち十数名が集まり、祝いを画策してくれたのである。これは、生きすぎたかなと思いはじめた程の生涯の中で始めてのことだった。

夕方二・三〇代の者たちが三々五々に現れて、会場はいつもの全くと違う異様な、たとえようのない雰囲気だった。たちまちわたしは有頂天になってしまった。シャツやマフラーなど身につけるプレゼントまで用意してくれていたのだから。

植木屋の職人になった嬉は、前の日に、細淵に、仕事が入って遅くなるが必ず行く、菅原のそばの席はオレのために空けておいてくれ、と電話で注文してきたという。会の終わりに近くにつけてきた嬉は、わたしの隣席を占め、たいそうご機嫌だった。健一郎がプレゼントしてくれた銘酒の一升瓶をいただきながら、わたしの記憶はそれ以後薄れていった。

あいつさえいなければと恨まれるばかりの彼らへの関わりだったのである。ホンキで命を奪おうとした輩もいるほどののだ。夢と思うほど嬉しく楽しい一歩だったのである。

九時過ぎに帰宅して床についた。翌朝早く穴水からの電話で起こされた。寝不足の頭を振って取った受話器から、「嬉が心肺停止の状態です。病院に搬送中だ。熊谷の病院に一緒に行ってくれ。」と叫んでいた。

まだ昨夜の銘酒が宿っていて、何のことだかをしきりに整理しようとしながら駆けつけた。

そして病院へたどり着いた時には彼はすでに亡くなっていた。

茫然自失の間もなく、最後に彼と会っていた者として若い警察官に、エンジンを切ったワゴン車の中で寒くて長すぎる聴取を受けた。

その朝早く彼は仕事に行く前にいつものように朝風呂を浴びに大浴場に行き、そこで発作を起こし溺死したという。聴取した警官による、何とも受け入れがたい事実だった。父は彼が小学六年生の冬事故死し

た。彼と私たちは父の会社が執り行った葬式に参列した。母は嬉が高校入学が決まった三月に突然死した。従って嬉は天涯孤獨なのである。

わたしは亡骸を引き取るために葬儀屋を頼んで来てもらってもいた。

しかし、警察は私どもには引き渡せないという。亡骸を引き取る法的根拠を私たちは持たないからだ。そんなわけで住所地の市に彼は預けられ、一夜をメモリアルホールで過ごすことになってしまった。

父や母のお骨を納めについた鳥取県の親戚に連絡を取り、翌日その親戚からの依頼でようやく彼は光の子どもの家に戻ってきた。葬りの式を牧師を頼んで、彼が育った光の子どもの家のホールで執り行った。自立未満で、近くにいる者たちや滅多に顔を見せなかった卒園生、彼に関わった元職員、小中学の教師や同窓、同業者の親方数名などが、青森から大阪から都合百五十名余が駆けつけて彼の死を悼んだ。

彼は光の子どもの家設立の年の夏、四歳になって乳児院からやってきたかわいい子どもだった。生後三ヶ月ほどで餓死寸前に誰もいないアパートで奇跡的に発見された。それから乳児院に措置されて、乳児院の担当だった宇並保育士が同道しての入所だった。宇並保育士は誕生日などの行事によく参加してくれて嬉などの

手がけた子どもたちとの関係を継続して、葬式にも参列して泣いた。彼の父母は覚醒剤の常習者で、その副作用が彼の胎児期に影響し、高校一年頃に荒れまくり、担当の倉澤保育士は、彼に殴られて上半身あざだらけになりながらも、抱え続けたのであった。思春期の大半を病院で覚醒剤の副作用症状と闘った。彼がいた病院や施設に出入りしていた造園業者との出会いから植木屋を志し、修行とも目録稼ぎともいいようなない仕事を重ねて暮らしを立てていた。

数年前に独立して営業活動をしながら、親方からも仕事をもらい、何とか暮らしの目鼻がついてきていた。ようやく親から引き継いだ心身両面での負因を乗り越えた嬉は、その負因の残滓としての発作を入院中に発症したことによって溺死したのであった。享年三十一歳。新たな記念日が光の子どもの家につけ加わった。以前交通事故と医療過誤によって十一歳で亡くなったかずきと共に納めるお墓の整備が急がれる。

児童養護施設を利用するに至った責めは大人にある。だが、その責めの大半と私たちの至らなさを加えた負の総量を子どもたちが担い続ける。幼少の人格に関わる者に、逃げる、辞めるという選択肢はないのだ。

## 現場から

### 追悼 高山嬉

倉沢 智子

彼が光の子どもの家によって来たのは、五歳間近の夏でした。当時の彼は色白で、栗色のサラサラヘア。電車の中で知らない人から、

「写真を撮らせてください。」と言われたこともあるほどのイケメンでした。

小学校高学年になるとスポーツ万能少年となり、当時習っていた剣道の月例大会では度々優勝。足の速さでも群を抜くようになっていました。

中学では陸上部に入部。八百メ

ートル走、千五百メートル走では、県大会出場の常連となりました。そして、体育祭ではまさにヒーロー。そんな彼の姿を見て、誇らしく思ったことを思い出します。

中学卒業後は、得意分野を生かして体育科に進学。しかし、間もなく病気になる高校を中退。その後は入院生活を送ることになりました。数年間の入院生活の後、造園業に就いてたくさんの方々に支えられながらではありましたが、何とか一人で生活を始められるようになりました。ここ数年の彼の

生活は、非常に落ち着いていたようです。

今年の元旦、彼は新年の挨拶にやってきました。そしてその日の夜、幼い頃よく泊りに行っていた私の実家の母や弟と十数年振りに電話で話をし、今年こそ会おうという約束をしていました。

一月十五日の夜は、菅原の誕生日を祝うために、仕事を終えたその足で倉沢家にやって来ました。誕生会終了後も、しばらく倉澤家に残って話をし、二十二時頃に深谷に帰って行きました。

そしてその七時間後、彼は三十一歳の生涯を終えました。

新年の挨拶にやって来たこと、私の実家に電話をしたこと、そし

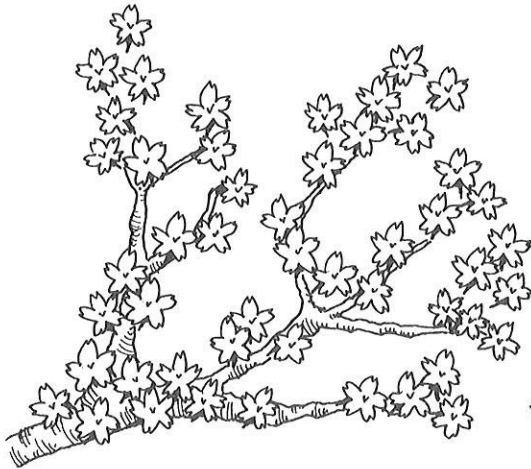


て菅原の誕生日にやって来たこと、そのひとつひとつが彼の「お別れ」の挨拶だったように思えてなりません。

一月二十日、光の子どもの家で前夜式が行われました。同級生、東大宮教会の方々、職場の皆さん、卒園生、元職員、私の予想をはるかに超える数の方々が集い、高山嬉がたくさんの方に愛され支えていただいていたことを実感しました。

職場の方々には、かなりわがままを言い、ご迷惑をおかけしていたようですが、それにも関わらず、遠くから足を運んで下さいました。元職員の中には、青森から夜行バスに乗って駆けつけてくれた者もありました。

そして、卒園してから音信不通になっていた卒園生をも、嬉は光の子どもの家に呼び戻してくれたのです。この日は卒園生、元職員など懐かしい顔が集まり、嬉の死を除けば、賑やかな同窓会でした。彼が天国へ召され、遺骨をこの手で取めた今も、まだこの事実を信じられずにいます。また、たくさんの方の深谷ねぎを抱えて、笑顔を見せてくれるような気がしています。



2012年も基準外職員確保のための  
「小さくても大バザー」を行います。  
6月2日(土)を予定しておりますが、  
バザー用品が大変不足しております。  
バザー用品のご協力をよろしくお願いし  
申上げます。

❀❀ 光の子ども家バザー実行委員会 ❀❀

## 日誌抄 = 子どもと創る暮らしの風景 =

2011年12月~2012年1月

2011年12月現在

幼児8名 小学生11名 中学生11名 高校生6名 措置  
外4名 計40名

- 1日 第二アドベント祝会
- 2日 小学校持久走大会 練習の成果を発揮出来た子も頑  
張って完走した子も満足そうな表情
- 3日 幼稚園表現発表会 盛り沢山のプログラムで子ども  
たちがかわいい踊りやピアノ演奏などを披露 普  
段は見せない緊張した顔で踊る姿も
- 8日 幼稚園との連絡会 多数の幼稚園生がお世話になっ  
ている幼稚園の先生方との連携を図る ご協力感謝
- 11日 第三アドベント祝会
- 12日 小学校との連絡会 二学期を振り返ってそれぞれの  
子どもたちに関しての丁寧な情報交換 ご協力感謝
- 18日 第四アドベント祝会
- 24日 クリスマスイブ礼拝 キャンドルサービスでは蠟燭  
の灯りの中で一年間の思いや感謝を伝え合う 深夜  
にサンタさんがこっそり来訪
- 25日 クリスマス祝会 ページェント 今年も多数のお客  
様が来て下さり子どもたちの降誕劇を通してイエス  
様の誕生を記念 その後みんなで賑やかな夕食会
- 28日 餅搗き ヨイショのかけ声で思い杵を振り下ろす  
晴天に恵まれた豊かなひととき

2012年1月

- 1日 元旦礼拝 新しい年を迎え新年の抱負をそれぞれ披露  
お年玉をもらって喜ぶ子どもたちの笑顔
- 5日 正月気分をぶっとばそう会 高山聖子さまによるハー  
プ演奏会 ハープを見るのも聴くのも初めてという子  
どもたちに貴重な経験をさせていただいた 感謝
- 8日 流山市でのオペラコンサート招待 幼稚園児から高校  
生まで多数鑑賞させていただいた 感謝
- 13日 杉本英夫さまによる夕礼拝 礼拝奉仕感謝
- 16日 卒園生高山嬉が逝去 突然の訃報
- 21日 高山嬉告別式 多数の卒園生や元職員また関係者の方  
々が参列 繋がり大切さとありがたさを改めて思う  
皆で悲しみを共にした
- 27日 東埼玉バプテスト教会木田牧師による夕礼拝 感謝  
<10、11月の物品ご寄贈者>  
ほっともつと はむこ会 岡村真千子 大利根愛育班 大利根  
地区郵便局 ステラ 藤沼畜産 小野田博哲 大塚工務店 溝  
呂木武幸 ふれあいの里敬愛会 暁星小学校 後藤利子 菊地  
友枝 長田美紗子 坂井清香 松本明子 杉山和俊 太田智子  
藤井多嘉史 福島章 他多数の各位様  
☆昨年中のあたたかいご支援本当にありがとうございました  
本年もどうぞよろしくお願いいたします(洋)

## /// ———— 反 射 光 ———— ///

☆春風が音を立てながら季節の移り  
変わりを知らせてくれていきます☆新  
しい年を迎えて間もなく私たちに悲  
しい知らせが届きました☆卒園生で  
ある高山嬉の早過ぎる死☆私たち光  
の子ども家の職員と子どもたちに  
加え多くの卒園生や関係者の方々総  
数約百五十名が葬儀に参列し嬉の死  
を悼みました☆三月十七日には第十  
四回となる出発(たびだち)の会に  
て浩伸と由子の新たな一歩を祝しま  
した☆お世話になった沢山の方々が  
御出席下さってこれまでを振り返り  
ながら力強い励ましをいただきました  
た☆また光の子ども家自立進学基  
金から来年度の大学生四名への自立  
資金として援助をいただいております  
☆各学校の卒業式を終えまた一つ  
上の学校に進む子どもたち☆特に高  
校受験を志望校合格という最高の形  
で終えた子どもたちには全く新しい  
環境での学びと出会いに励んでほし  
いと思います☆多くの方々に支えら  
れ祈られながら大きくなっていく子  
どもたちに寄り添う私たちも心を新  
たに尽力してまいります☆今後とも  
よろしくお願いいたします☆(洋)